指示と代用

― 文脈指示における指示表現[*1]の機能の違い ―

庵　功雄

【キーワード】文脈指示、結束性、指し方、指示対象、接続詞

【要旨】

本稿では、文脈指示におけるコ系統、ソ系統、ゼロの対立のパターンについて考察する。この３系統は、本稿で「指示」、「代用」と呼ぶ２種類の対立のパターンを示す。この「指示」と「代用」は機能的には全く異なったものである。即ち、前者は「指し方」が問題となる意味的な関係であり、文脈を考慮することなしにコ系統、ソ系統、ゼロのいずれが選ばれるかを決めることはできないのに対し、後者は「指示対象」が問題となる語彙・統語的な関係であり、コ系統の使用が統語的に禁じられている一方、ソ系統とゼロは常に等価である。最後に、「指示」と「代用」を区別することの意義として、「それ」という語について考察し、それに基づいて接続詞の統語・意味的特徴について一言する。

０．はじめに

日本語のテキストの結束性(cohesion)[*2]を体系的に考察しようとするときに重要な部分を占めるのが、文脈指示[*3]で用いられる指示詞(及びゼロ)である。

文脈指示の指示詞(ゼロを含む)の対立のパラダイムは、コ系統、ソ系統、ゼロであるが、これには次の２種類の対立のパターンが存在する。

[*1] ここで言う「指示表現」は、生成文法で言う'R-expression'の訳語としての意味(cf.三原(1994))ではなく、指示詞を含む表現とゼロを含む表現の総称である。

[*2] 結束性とは「ある要素が自らの解釈を他の部分に依存することによって他の部分と結びつくこと、及び、複数の文／節がそれらの間の連鎖的(sequential)意味によって結びつくこと」(cf.Halliday & Hasan(1976))である。

[*3] 本稿では「文脈指示」をHalliday & Hasan(1976)の「テキスト内指示(endophora)」の意で使うので、ア系統は考察対象としないがゼロは考察対象に含める(cf.庵(1994))。

（Ⅰ）a. コ系統、ソ系統、ゼロが潜在的には交換可能。

b. コ系統の使用は統語的に禁じられているか、コ系統を使うと指示対象が異なる。ソ系統とゼロとは(ゼロが統語的に許される限り)交換しても意味は変わらない。

各々の例は次のようなものである(φはそこに要素がないことを示す)。

（Ⅰ)a. の例：

(1) 昨日生協でぜんざいを食べた。この/その/φぜんざいはうまかった。

(2) 英国バッキンガム宮殿のスポークスマンによると、ダイアナ皇太子妃はこのほど愛車ベンツを手放すことになった。経済不況の波が王室にも及び、国民と同様、緊縮財政をというのがその理由だ。この(/その/φ)ベンツは、今年のはじめに手に入れた際、国会議員や国産車メーカーなどから、"愛国心がない"と批判を浴びた代物。(朝日新聞朝刊1992. 10. 3)

（Ⅰ)b. の例：

(3) 太郎が花子を殴った。次郎も*こうした/そうした/φだ。

(4) こんどの列車を待つ客は私を含めて４人であった。(中略)まともな乗客が二人、そう(/*こう/??φ)でないのが２人という割合である。

(宮脇俊三「汽車旅１２カ月」)

(1)(2)ではコ系統、ソ系統、ゼロが全て使える。一方、(3)(4)ではコ系統はどのような文脈でも使えないが、ソ系統とゼロは交換しても意味は変わらない((4)でゼロが使いにくいのは統語上の個別的(ideosyncratic)要因による)。

本稿では、文脈指示について考える際にこの両者を区別することが重要であることを示し、その応用として、接続詞の統語・意味的特徴に関して一言する。

1．指示と代用

前述のように、本稿のテーマは(Ⅰ)a. と(Ⅰ)b. を区別することの意義を論じることにあるが、両者はHalliday & Hasan(1976)の言う「指示(reference)」と「代用(substitution)」の区別に相当する[*4]。

Halliday & Hasan(1976)は「指示」と「代用」を次のように区別している。

（Ⅱ）a. 指示：先行詞との関係は意味的で、先行詞を得るには解釈が必要。

b. 代用：先行詞との関係は語彙・統語的(lexico-grammatical)で、先行詞はそのままの形で表層に存在する[*5]。

このことは換言すれば次のようになる。

（Ⅲ）a. 指示は指示対象(referent)を問題とするレベルの対立ではなく、指し方(way of referring)を問題とするテキストレベルの対立である。

b. 代用は指示対象を問題とする語彙・統語レベルの対立である。

Halliday & Hasan(1976)の枠組みは英語の記述としては有効であるが、それがそのままの形で他言語に応用可能であるという保証はない[*6]ので、それが日本語の文脈指示の記述に応用可能であるか否かは日本語の言語事実に照らして具体的に検証しなければならない。本稿はこの部分におけるHalliday & Hasan(1976)の枠組みの日本語への応用可能性を検証しようとするものでもある。

2．指示(テキストレベルの対立)

先に(Ⅲ)で、「指示」はテキストレベルの対立であり潜在的にはコ系統、ソ系統、ゼロが交換可能であるが、「指し方」の違いによって３形式の許容度が異なる、ということを述べた。ここでは指定指示[*7]で用いられるノ形(この、その、ゼロ)を例に、「指示」についてこのことを具体的に考えてみたい。

---

*4 指示と代用を区別することの意義については安井・中村(1984)も参照されたい。なお、'substitution'の訳語として安井・中村(1984)は「代示」を用いているが、彼らも、これは次善の訳であり「代用」を用いる方がよいと述べている(p.26)。

*5 Halliday & Hasan(1976)が「指示」に含めるのは指示詞、定冠詞、人称代名詞等であり、「代用」に含めるのは、名詞を代用するone、動詞句を代用するdo (so)、節を代用するso等である。

*6 Hallidayの枠組みは、生成文法のように統語構造の言語普遍性を前提とせず、むしろ意味を基準としてその意味の形式への反映を考えるものである(cf.Halliday(1985:introduction))ので、意味の形式への反映の仕方は個々の言語で個別に検討しなければならないものと思われる。

*7 指定指示とは(本稿と関連する部分だけを述べると)、(7)のように「この／その／ゼロ＋ＮＰ」全体で先行詞と照応する場合である(cf.林(1983)、庵(1995a))。

(7) 先日本を買って読んだ。この/その/φ本はなかなか面白かった。

「この」「その」「ゼロ」の分布の可能性は論理的には次の７通りある(３形式が全て許容されない場合は考慮外とする)。(○＝結束的、×＝非結束的)

(Ⅳ)

パターン	1	2	3	4	5	6	7
この	○	○	○	×	○	×	×
その	○	○	×	○	×	○	×
ゼロ	○	×	○	○	×	×	○
可否	ok	ok	ok	×	ok	ok	ok

次に各々の例を見ていくが、その前に指定指示の「この」と「その」の機能を次のように規定しておく(この規定の詳細は拙論(庵(1995c))を参照されたい)。

(Ⅴ) この：先行詞をトピック[*8]との関連性という観点から捉えていることを示すマーカー

その：先行詞をテキスト的意味[*9]の付与という観点から捉えていることを示すマーカー

上の７つのパターンの内、パターン４の用例は存在しない[*10]ので、実在するパターンは６つだが、これは機能的には次のように分類される。

[*8] 本稿では「トピック」を次のように定義する(cf.庵(1995c))。

(イ) テキストの内容を１名詞句で要約する時、その名詞句をそのテキストの「トピック」と言い、トピックに必須的に現れる名詞句をそのトピックと関連性が高い名詞句と言う。

これを(ウ)を例に説明すると次のようになる。即ち、このテキストのトピックは「殺人事件」であり、そのトピックは殺人者、被害者、殺人現場、事件の日時等の要素から構成される。これらがトピックと関連性が高い名詞句である。

(ウ) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べによると、この(/#その/φ)女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。(日刊スポーツ1992.11.22)

[*9] テキスト的意味とは、定情報名詞句(テキスト内で２度目以降に現れる名詞句。(エ)では「その智恵子」)にテキスト内で臨時に付与される属性のことで、(エ)で言えば「いつも「東京には空がない」と言っていた」の部分がそれに当たる。

(エ) 智恵子はいつも「東京には空がない」と言っていた。光太郎はその智恵子に空を見せるために東京を離れ、故郷に向かった。

[*10] パターン４は後に見る「代用」の典型的な分布である。この点で、「指示」と「代用」は機能的に相補分布をなしていると考えられる。

(Ⅵ)

先行詞が顕著(salient)　NO →パターン７……(i)
↓YES
テキスト的意味の付与が随意的　NO →パターン６……(ii)
↓YES
言い換えがない　NO →パターン５……(iii)
↓YES
テキスト的意味の付与が十分　NO →パターン３……(iv)
↓YES
名詞の定可能性が高い　NO →パターン２……(v)
↓YES
パターン１　……(vi)

まず、(i)と(ii)～(vi)の違いは先行詞の顕著さ(saliency)の違いにある。

パターン７：(この, その, φ)＝(×, ×, ○)

(5) 昨夜乗用車が国道176号線沿いのポストに接触しガードレールに衝突ししました。この事故で乗用車に乗っていた二人は即死し、φ/#この/#そのポストは根元から折れました。

(5)では「この」も「その」も使えないが、これは先行詞(「ポスト」)が、このテキストのトピック(「交通事故」)が形成するフレームの中で目立たない(顕著さが低い)ものであるためだと考えられる。

次に(ii)と(iii)～(vi)の違いはテキスト的意味の付与が義務的か否かによる。

パターン６：(この, その, φ)＝(×, ○, ×)

(6) 田中君は泳ぎが得意で国体にも出たことがあるんです。(a)その/#この/#φ田中君が溺れ死ぬなんて信じられません。

(6)では「その」しか使えない。ここで、(6)a.を抽象化した(7)を考えてみると、

(7) Ｘが溺れ死ぬなんて信じられない。

(7)が先行文脈と結束的になるには、Ｘが「溺れ死ぬことが信じられない」といった属性を持っている必要がある。従って、Ｘに入り得るのはそうした属性の指定に関し中立的な「田中さん」ではなく、「「泳ぎが得意で国体にも出たことがある」田中さん」といったテキスト的意味を付与された名詞句でなければならない。しかも、この環境では「その」の使用が義務的である。従って、「その」

はテキスト的意味の付与をマークするマーカーであり、文脈的に定情報名詞句へのテキスト的意味の付与が義務的な場合にはその使用が義務的になるのである。

次に、(iii)〜(vi)に共通する特徴は「この」が使えるということである。

その中で、(iii)と(iv)〜(vi)の違いは「言い換え」があるか否かにある。

パターン５：(この, その, φ)＝(○, ×, ×)

(8) エリザベス・テーラーがまた結婚した。この/#その/??φ女優が結婚するのはこれで七回目だそうだ。

(8)a.では先行詞「エリザベス・テーラー」が「この女優」と言い換えられている。この場合に「この」の使用が義務的なのは、「この」が先行詞との同一物指示(coreference)を保証する「同定詞(identifier)」としての機能を持っており、その機能を持つのは「この」に限られるからである(cf.庵(1993))[*11]。

残る三つのパターンの差異は微妙だが、次のようなことは言えるだろう。

まず、(iv)と(v)(vi)の違いはテキスト的意味の付与が十分か否かにある。

パターン３：(この, その, φ)＝(○, ×, ○)

(9) ＪＲ大阪駅北側で解体工事が進んでいる旧大阪鉄道管理局舎で、コンクリートの中に、建設当時の大正末期から昭和初めに発行された新聞紙が詰め込まれているのが見つかった。φ(/この/#その)新聞紙が出てきたのは、正面玄関の柱や壁。(朝日新聞朝刊1992.10.2)

(10) 証言によると、森口元副社長は一九八七年七月中旬、共和の当時の常務を通じて、阿部元長官から「大臣になるための根回し資金として一千万円必要だ」と頼まれた。森口元副社長はすぐに現金一千万円をこの(/#その/φ)常務に持たせ、東京永田町の衆議院会館の阿部事務所に届けさせた。(朝日新聞朝刊1992.10.3)

(9)(10)は「その」が使えないが、これは定情報名詞句へのテキスト的意味の付与が不十分なためだと考えられる。例えば、(10)の定情報名詞句に付与されるテキスト的意味は「共和の当時の」という部分だけで、それに基づいて何かを述べる(これはテキスト的意味の付与が行われる際の基本的な動機付けだと考えられる(cf.(6)))には情報的に不十分で、そのために「その」が使えないのであろう。

最後に(v)と(vi)は先行詞の定可能性(definitizability)によって区別される。

パターン２：(この, その, φ)＝(○, ○, ×)

(11) かぜをひいている人がせきをすると、かぜのばいきんが空気の中にまきちらされます。その(/この/#φ)空気をすうと、ばいきんがのどの中につきます。(林(1973))

(11)の先行詞「空気」には顕著さがあると考えられるが、(9)(10)とは異なり「ゼロ」は使えない。これは「空気」という名詞が繰り返して使われただけでは定であると認知されない(されにくい)名詞であることによると思われる。名詞が限定詞を伴わず繰り返して使われただけで定性を表示できる時その名詞は「定可能性」を持つと言うことにすると、ここの問題は次のように捉えられる。

(Ⅶ) 定可能性が低い名詞が先行詞であるときは「ゼロ」は使えない[*12]。

以上の全ての条件を満たした場合には(2)や(12)のように「この」「その」「ゼロ」が全て使用可能になる。

パターン１：(この, その, φ)＝(○, ○, ○)

(12) 来年四月一日に合併する住友工業系の鉄鋼商社、住金物産(本社・大阪市)とイトマン(同)は二日、大阪中央区の住友金属本社で合併準備委員会の初会合を開いた。φ(/この/その)会合では、イトマン社員の動揺を防ぐため、合併後も当面はそれぞれの組織や給与水準を尊重し、性急な一本化はしないことで合意した。(朝日新聞朝刊1992.10.3)

本節では、「指示」がテキストレベルの対立であることをノ形におけるコ系統、ソ系統、ゼロの対立のあり様を材料に論じた。ここで重要なのは、ここで見たような対立はテキストレベルのものであり、文脈を考慮することなしにあ

*11 次のような「内包型の言い換え」の場合には「ゼロ」が使えることがある(cf.庵(1993))。

(オ) 自分が苦しい時は相手も苦しいものだ。この辺からプロでも二転三転することはよくある。が、羽生が勝つとだれもが思っていた。時代が、この(/#その/φ)21歳の天才を呼んでいるようにも映った。(鈴木輝彦「観戦記」日経新聞夕刊1992.10.26)

*12 定可能性がない／低い名詞には次のようなものがある(cf.庵(1993))。

(カ) 空気、言語、概念、美、原理

る形式が結束的かどうかを決定することはできない、ということである。

３．代用(語彙・統語レベルの対立)

２.では「指示」がテキストレベルの対立であることを論じた。一方、先に「代用」ではコ系統の使用が統語的に禁じられていると述べた。これは、代用で使われる指示詞が「埋め草(filler)」にすぎず、かつ、コ系統には埋め草の用法がない、という事実に由来する(cf.庵(1995b))[*13]。従って、代用の可能な対立のパターンは論理的には次の三通りだが、この内、パターン３は存在しない[*14]。

(Ⅷ)

パターン	1	2	3
この	×	×	×
その	○	○	×
ゼロ	○	×	○
可否	ok	ok	×

(○=文法的、×=非文法的)

次にこの２つのパターンを見ていく。

パターン１は最も典型的な代用のパターンであり、次のような場合がある。

パターン１：(この,その,φ)=(×,○,○)

a.名詞句の一部を代用する場合(cf.神尾(1983)、Saito & Murasugi(1990)、金水(1995))

(13) 郷田が長考派なのは局面を楽観的に見られないからだろう。(中略)本局も、[NP 中原の[N' 残り時間]]二時間十二分に対して、[NP 郷田の[N' それ(/??これ/φ)]]は十一分だった。(「週刊将棋」1992.7.1)

[*13] ただし次のような主題化構文では例外的にコ系統が現れる(cf.野田(1994))。

(ｷ) 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これ(/??それ)を保持しない。
(「日本国憲法」第九条)

ただし、主題化構文でも後述の代行指示の場合にはこの限りではない。

(ｸ) 核兵器は、その/??この使用が国際法で禁じられている。

[*14] 次のような例のソ系統を許容しない話者もいるが、それは文体的な問題であって、統語的なものではないと考える。

(ｹ) 先日、学会の会場で先生が*この/その/φ(御)著書を読んでおられた。

b.代行指示[*15]の場合

(14) A代議士はその/*この/φ愛人と一緒のところを写真に撮られた[*16]。

c.先触れ語(寺村(1977))の場合

(15) a.それ/b.*これ/c.φで三島由紀夫が割腹した刀[*17]

d.強調表現

(16) 奨学金がないと、研究はおろか生活それ/*これ/φ自体が成り立たない。

e.動詞句代用

(17) 太郎が次郎を殴った。三郎もそうした/*こうした/φだ。

このように「代用」にはいくつかのパターンがあるが、それらに共通してソ系統の有無が意味の違いをもたらさないのは、「指示」の場合とは異なり、ソ系統が意味的に空である埋め草であるからである。

次にパターン２だが、これは統語上の個別的な理由によってゼロが使えない場合であり、機能的にはパターン１と同様のものである。

パターン２：(この,その,φ)=(×,○,×)

(18) 男らしさ(ﾏﾁｽﾓ)を貴ぶ[ｷｭｰﾊﾞの]ラテンアメリカ気質の中で最後に残された差別とは、どうやらホモセクシュアルに対するそれ(/??これ/*φ)らしいのだ。(「週刊朝日」1994.9.9)

本節では「代用」について論じた。ここで重要なのは、「代用」ではコ系統が適格になる文脈は存在しない、即ち、コ系統は「統語的に」許容されない(つまり、非文法的である)ということである。

[*15] 代行指示とは(本稿に関連する部分だけを述べると)、(14)のように「その／この」の「そ／こ」の部分だけが先行詞と照応する場合である(cf.林(1983)、庵(1995b))。

[*16] 次のような例では「その」の有無で指示対象が異なり得るが、それは「指示対象レベル」(「代用」)の問題であって、「指し方レベル」(「指示」)の問題ではない。

(ｺ) a.私は太郎がφ弟を殴っているのを見て激怒した。 (弟＝私の弟/太郎の弟)
b.私は太郎がその弟を殴っているのを見て激怒した。(弟＝太郎の弟)

[*17] (15)b.は現場指示としては文法的だが(ただし、この場合は通常(ｻ)のように「という」が必要である(cf.高橋(1996印刷中)))、文脈指示の解釈では非文法的である。

(ｻ) ここから太郎が来たという/??φ駅

４．「指示」と「代用」の応用

２.，３.では「指示」と「代用」の性質について論じた。ここでは、両者を区別することの意義を考えるために、２つの現象について論じる。

４－１．「それ」の機能

まず「それ」という形式に注目する(cf.庵(1995d))。次例を考えて頂きたい。

(19) a.先日生協で本を買って読んだ。それはなかなか面白かった。
　　b.漱石の本と鴎外のそれではどちらがよく読まれていますか。

(19)a.b.の「それ」の先行詞は一見同じであるように見えるがそうではない。この点に関して次例を考えて頂きたい。

(19)' a.先日生協で本を買って読んだ。その本はなかなか面白かった。
　　b.漱石の本と鴎外のその本ではどちらがよく読まれていますか。

もし、(19)a.の「それ」の先行詞と、(19)b.の「それ」の先行詞が同じならば、(19)a.、(19)b.の「それ」を置き換えた(19)'a.と(19)'b.も等価であるはずだが、実際に等価なのは(19)a.と(19)'a.だけであり、(19)b.と(19)'b.は等価ではない((19)'b.は「本」が先行文脈で既に言及されているか、現場指示でなければ非文法的である)。さらに次例から分かるように、コ系統に置き換えられるのは(19)a.であって(19)b.ではない。

(19)'' a.先日生協で本を買って読んだ。これはなかなか面白かった。
　　b.*漱石の本と鴎外のこれではどちらがよく読まれていますか。

以上から分かるように、(19)a.の「それ」の先行詞は表層に存在する単なる「本」ではなく、「先日生協で買って読んだ」という「テキスト的意味」を付された本であり、その意味でこの場合の照応は「指示」的[*18]である。一方、(19)b.の「それ」の先行詞はそうしたテキスト的意味の付与のない表層の「本」であり、その意味でこの場合の照応は「代用」的である。以上のことから、(典型例における)「指示」と「代用」の違いは次のようにまとめられる。

[*18] 本稿では「指示的」という語を二つの用法で用いる。一つは、具体的な指示対象を持つという'referential'の意味であり、今一つは「指示」の形容詞形としての'of reference'の意味である。後者の場合は「「指示」的」のように「指示」の部分を「」で囲んで示すことにする。

(Ⅸ) 指示と代用の対立パターン

	対立の仕方	ノ形への置き換え	テキスト的意味の付与
指示	潜在的には３形式共可能	可能	あり[*19]
代用	コ系統は非文法的	不可能	なし

４－２．「それ」を含む接続詞

指示と代用の区別が有効である今一つの現象は、接続詞に関するものである。

接続詞の中には「それで、それなら、それから、それとも」のように「それ」を含むものが多くある。これらは「それ」の機能の違いによって下位分類できるが、そのことを考える前に接続詞を次のように定義しておく(cf.庵(1996印刷中))。

(Ｘ) 接続詞とは次のような機能を持つ語である。

(テキスト的機能)

a.複数の文がそれらの間の連鎖的(sequential)意味で結びついている時に、その連鎖的な関係を明示する(cf.Halliday & Hasan(1976))。
b.文頭に位置し、それを含む文が先行文脈とどのような意味関係にあるかを先触れし、読み手／聞き手のテキスト解釈を容易にする。

(統語・意味的特徴)

c.具体的な指示対象を持たない。(接続詞であるための必要条件)
d.内部にソ系統の語を含み、かつ、それを省略した形もまたa.～c.の性質を持つならば、そのソ系統の語の有無で意味は変わらない[*20]。

[*19] (8)のように言い換えがある場合、及び、(シ)のように先行文(連鎖)に名付けをする場合(庵(1994)では「ラベル貼り用法」と呼んでいる)はテキスト的意味の付与はないが、先行詞に至るためには解釈が必要なので「指示」に含める。

(シ) 夜、ある町の外科医のところへ大怪我をした男が治療を受けにきた。住所をきくと隣りの町から来たという。「隣りの町なら、有名な外科医がいるのに、どうしてわざわざここまで来たんです？」この(/*その/?ø)ジョークのオチは読者に考えていただこうと思う。
(織田正吉『ジョークとトリック』)

[*20] これと類似した記述が三上(1955:183)に見られる。

(ス) 「デハ」や「ナラ」は「ソレデハ「ソンナラ」から出てきたように思われる。「ソレ」が残っていても消えていても意味がほとんど違わないところを見ても、それが代名詞離れしていることがわかる。

(Ｘ)c.は指示詞と接続詞を区別するものである。(20)と(21)を比較されたい。

(20) あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ 船場さ 船場山には狸がおってさ それ(/その狸)を漁師が鉄砲で撃ってさ 煮てさ 焼いてさ 喰ってさ...(「あんたがたどこさ」)

(21) お重：だから、流行病で息子さん夫婦が亡くなっちゃったんだよ。生まれたばかりの赤ん坊を残してさ。藤吉さん夫婦はその赤ん坊を引き取って一生懸命育ててるんだよ。お金がいるのは当たり前だろ。それをあんたって男は。

(「コメディーお江戸でござる」1995.9.14放送分)

(20)の「それ」は具体的な指示対象を持っており、それに対応してノ形に置き換え可能である。これに対し、(21)ではそうした置き換えは不可能であるが、これは「それを」全体が接続詞化していることを示していると考えられる。

一方、(Ｘ)d.は接続詞が持つ次のような性質を捉えたものである。(22)～(24)を考えて頂きたい。

(22) 万延元年四月五日、彦根藩井伊家三十五万石は、後継者にそっくり家督相続された。藩主が生前跡目を決めずに死ねば、掟(おきて)によりお家断絶、家臣は浪々の身となる。直弼は急に死ぬとは思ってないし、正室との間には子がなかった。それ(/φ)で、襲われて八日後、死んでいる直弼から幕府へ「痛所痛候に付(つき)登城致し難し」の届けが出され、さらに側室との子を世嗣としたい、自分は傷の治療のため彦根へ帰りたい旨が届けられた。(朝日新聞朝刊1993.4.5)

(23) 業界では「昭シェルには財務のプロが多く、金融取引がうまい」という定評があった。それ(/φ)なのに失敗したのは、先物取引がいかにリスクが大きいものかを示している。(朝日新聞朝刊1993.2.24)

(24) 「なぜ、一般競争入札が駄目なのか」との質問に、建設省は、「(中略)工事中に倒産したり、途中で投げ出すケースを防ぐ必要もある。φ(/それ)で、信頼できる業者を選定したい。外国を見ても、何らかの事前審査制はある」と強調する。(ＡＥＲＡ1993.5.25)

(22)(23)は「それ」を含む接続詞だが、この場合「それ」の有無により意味は変わらない。逆に、(24)のような(22)(23)に対応するゼロ形式に「それ」を付加してもやはり意味は変わらない。これは、接続詞が指示的な(referential)要素を内部に含まないという(Ｘ)c.の性質からも自然に説明できるが、その派生過程からも説明可能である。次例を考えて頂きたい。

(25) a.もうくろは、まだ小さくて、力がよわいから、畑のしごとも車をひくこともできません。それで、お父さんが畑へ出かけるときには、もうくろは、母牛について行って、そばで草をたべながらあそんでいるのです。(林(1973))

b.[c [s もうくろは、まだ小さくて、力がよわいから、畑のしごとも車をひくこともできない／ません]ので、]お父さんが畑へ出かけるときには、もうくろは、母牛について行って、そばで草をたべながらあそんでいるのです。(cは節の境界を表す)

c.[s もうくろは、まだ小さくて、力がよわいから、畑のしごとも車をひくこともできません。]; φ; で、お父さんが畑へ出かけるときには、もうくろは、母牛について行って、そばで草をたべながらあそんでいるのです。

林(1973)は、例えば(25)b.を(25)a.と対応させることによって、接続助詞と接続詞の関連性を捉えている。本稿では基本的にこの分析を正しいとした上で、次のような派生の経路を考える。

まず、(25)a.は(25)b.に由来する。次に、(25)b.のノデ節(接続節)を「真性モダリティを持たない文(S)」(野田(1989))と「ので」に分ける(この際「ので」を「で」に変える)。以上の操作は(25)a.と(25)b.が意味的に等価であるという事実を捉えているものと思われる。この分析が正しければ、「で」の前にはSの移動によって生じた空白が存在する。ここに入り得るのは埋め草であるから、ソ系統である「それ」を挿入すると(25)a.が得られる。なお、「で」はそれだけ

で独立できるから、「それ」が挿入されなければ(25)c.が表層の形になる[*21]。

ここで採った分析は(13)や(16)等の代用の分析一般と平行的なものなので、これらの接続詞は「代用的な接続詞(conjunctive of substitution)」である[*22]。

(13) 本局も、中原の残り時間二時間十二分に対して、郷田のそれ(/??これ/φ)は十一分だった。

(16) 奨学金がないと、研究はおろか生活それ/*これ/φ自体が成り立たない。

一方、(IX)で見たように、代用ではテキスト的意味の付与はない。従って、これらの接続詞に含まれる「それ」にもテキスト的意味の付与はない。

以上見てきたように、大部分の接続詞は「代用的」である[*23]。しかし、一部の接続詞は「「指示」的」であり、テキスト的意味の付与がある。そうした「「指示」的接続詞」には「それが」(cf.浜田(1993))と「それを」がある。

接続詞としての「それが」「それを」の例は次のようなものである。

(26) 冷戦時代は、キューバからの亡命者は自由の戦士ともてはやされ、米国の市民権を与えられた。それが、いまはすっかり邪魔者扱いである。
(週刊朝日1994.9.23)

(27) [犯人を追って行って帰って来た男十郎に辰が尋ねる]
辰:[犯人は]どんな奴だった。
男十郎:それが、すまねぇ。すばしっこい野郎で、あっという間に逃げられちまった。(「宝引の辰捕者帳」1995.8.18放送分)

*21 「それから」のように「それ」を除いた部分が接続詞として使えないものの場合も基本的には同様である((t)a.は林(1973)より)。
(t) a.さんちゃんは、おので木をきりました。それから、のこぎりでひきました。
b.さんちゃんは、おので木をきってから、のこぎりでひきました。
c.[s さんちゃんは、おので木をきりました。]i φiから、のこぎりでひきました。
「それで」の場合との違いは「から」は接続詞としては使えないので、「それ」の挿入が義務的であるということである。

*22 本稿では「それ」を含む接続詞のみを考察対象としたが、(25)のような分析は「そして」「そこで」等のその他のソ系統を含む接続詞についても有効である。ただし、「それ」以外のソ系統を含む接続詞は全て「代用的」である。

*23 接続詞の大部分が「代用的」なのは、接続詞が「非指示的(non-referential)」な語である(cf.(X)c.)ということからしても当然のことである。

(28) 直接に手をかけていないものの、松本代行は文字通り、窪田さんを見殺しにしたことになる。刑法学者の板倉日大教授によると、その行為は共同正犯にあたるという。
「末端の信者が驚いて声が出なかったのならともかく、教祖夫人の松本代行はこうした行為を止められる立場にあるはず。それを(/それなのに)何もせずに見逃したのなら、黙示の現場共謀として殺人の共犯に問われる可能性もあります。(後略)」(日刊スポーツ1995.6.15)

(29) 私が混合[列車]に乗ったのは、多分八〇年の二月だった。あるいは、あの列車は、あの年の九月までで、姿を消したのかもしれない。それを私は、その後十五年間も、もしかしたら、まだ走っているかもしれない、と一縷の夢を抱き続けていて、こうして、のこのこやって来て、やっぱり、ということになったわけだ。(古川高麗雄「肥薩線今昔」)

なぜこれらを接続詞としてよいのかという問題や、そうした性質が現れるメカニズムについて詳しくは拙論(庵(1996印刷中))を参照して頂きたいが、本稿との関連で重要なのは、これらが「予測裏切り性」を持つということである。

予測裏切り性とは、先行文脈を読んだ/聞いた段階で読み手/聞き手が持つ予測を裏切る内容が後続文において述べられるということであり、これらの接続詞は文頭にあって、それを含む文においてそうした予測裏切り的内容が述べられるということを読み手/聞き手に先触れする機能を持つ。

例えば、(27)の「辰」の質問には「お前は犯人を追って行ったのだから、顔ぐらいは見ただろう」という予測/期待が含まれており、「辰」は「男十郎」がそれに沿った答えをすると予測している(と「男十郎」は考えている)が、「男十郎」はその予測/期待に沿った答えができないので、これからその予測/期待を裏切る答えをするということを「辰」に対して予め断っているのである。他の例についても同様の解釈をすることができる。

一方、庵(1996印刷中)で詳論したように、「予測裏切り性」は(義務的な)「テキスト的意味の付与」と密接な関係にある。つまり、接続詞「それが」「それ

を」の「それ」の部分には先行文脈からのテキスト的意味の付与がある[*24]。従って、これらは「「指示」的な接続詞(conjunctive of reference)」である。

以上を図示すると次のようになる。

（ＸＩ）指示、代用と接続詞の関係(1)

	「それ」の部分にテキスト的意味の付与あり（「指示」的接続詞）	「それ」の部分にテキスト的意味の付与なし（代用的接続詞）
「それ」が省略不可能	それが[*25]、それを	それから、それに[*26]…
「それ」が省略可能	該当形式なし	それで(は)、それなら(ば)、それなのに…

（ＸＩ)は「それ」の部分の機能の違いに基づく分類だが、これとは別に、「それＸ」という語形全体が表す意味機能(即ち「予測裏切り性」を持つか否か)に基づく分類も可能である。これらの分類は基本的には一致するが、異なる部分もある。それは「それなのに、それにもかかわらず」という語に関するものである。

「(それ)なのに」「(それ)にもかかわらず」は(30)や(31)から分かるように、意味的には「それが」や「それを」と同様の予測裏切り性を持つ。例えば、(31)では、「あの辺は中曾根や福田赳夫の地盤である」という記述から、(有力な政治家の地元には新幹線が止められることが多いといった百科辞典的知識に基づいて)「高崎には(いつも)新幹線が止まるはずだ」といった予測が生まれるが、(31)a.の内容はその予測を裏切っている。

(30)　狭軌の鉄道の速度は、軌道の規格や状態にもよるが、時速六〇キロ

[*24] これらがテキスト的意味の付与があるにも関わらず接続詞であると言えるのは、これらが(Ｘ)c.を満たすためである(cf.庵(1996印刷中))。

[*25] 「それが」は一見「が」と対応づけられそうだが、本稿では庵(1996印刷中)と同様の理由から、「が」は「だが」の省略形であり「それが」の省略形ではないと考える。

[*26] (ソ)から分かるように、「それに」「それと(も)」は(25)と同様には分析できない(cf.杉浦(1995))。この現象の理由は今のところ不明である。

(ソ) a.太郎が来ますか。それとも花子が来ますか。

b.*[s 太郎が来ます／来る]とも、花子が来ますか。

ないし一〇〇キロぐらいが適当なように私には思われる。それ以上になるとスリルを感じ、以下になるとまだるっこしくなる。三〇キロ以下ではいらいらしてしまう。

それ(/φ)なのに、宮原線の運転士はハンドルを左手で軽く握ったままの姿勢で前方を見つめ、たまに右手で鼻の先を掻く程度で、じいっと二〇分を過すのである。(宮脇俊三「終着駅は始発駅」)

(31)「高崎に停車しないなんてすごいでしょう」

「有力な政治家がいないからですか」

「いや、むしろ逆で、あの辺は中曾根や福田赳夫の地盤です。(a)φ(/それ)にもかかわらず、高崎に停まらない勇ましいのが一日二往復だけあります。これが、その一本。(後略)」(宮脇俊三「途中下車の味」)

このように、「(それ)なのに」「(それ)にもかかわらず」は意味的には「指示」的な性質を持っているが、その一方で、統語的には「それ」の有無によって意味が異ならないという代用的な性質を持っている。

これは、この場合の予測裏切り性が「なのに」(の中の「のに」)「にもかかわらず」という語の意味特性に由来しているためである。この点でこの両語は「それＸ」全体で予測裏切り性を表す「それが」や「それを」とは異なる。

以上を図示すると次のようになる。

（ＸＩＩ）指示、代用と接続詞の関係(2)

	予測裏切り性を持つ	予測裏切り性を持たない
「それ」が省略不可能	それが、それを（「指示」的）	それから、それに…（代用的）
「それ」が省略可能	それなのに、それにもかかわらず(「指示」・代用的)	それで(は)、それなら(ば)…（代用的）

５．まとめ

本稿では、文脈指示で使われる指示表現の機能の違いを考えるためには「指示」と「代用」という概念を導入する必要があるということを論じた。「指示」は意味に基づく関係であり、指示表現について言えば、潜在的には、コ系統、

ソ系統、ゼロが全て使用可能であり、基本的にはレ形とノ形が交代可能である。一方、「代用」は語彙・統語的な関係であり、指示表現ではコ系統が常に非文法的になり、レ形しか使うことができない。最後に、両者を区別することで接続詞の機能についての新たな知見が得られることを見た。

「指示」と「代用」の区別の意義は、英語では既にHalliday & Hasan(1976)が詳論している(Quirk et al.(1985)も参照されたい)。本稿の意義は、両者の区別が日本語の文脈指示の記述にも有効であることを示した点にある。また、ソ系統は指示、代用のいずれにも使われるが、両者における機能は全く異なる(前者のソ系統はテキスト的意味の付与をマークするが、後者にはテキスト的意味の付与はない)。こうしたことから、指示詞の研究で多く行われているような文脈指示を一様に扱う方法(eg.金水・田窪(1990,1992))では十全たる予測可能性を持った記述はできないと思われるのである(cf.庵(1995e))。

【参考文献】

庵　功雄(1993)「「この」と「その」の文脈指示用法の研究」1992年度大阪大学修士論文
－－－－(1994)「結束性の観点から見た文脈指示」『日本学報』13 大阪大学
－－－－(1995a)「テキスト的意味の付与について」『日本学報』14 大阪大学
－－－－(1995b)「語彙的意味に基づく結束性について」『現代日本語研究』2 大阪大学
－－－－(1995c)「コノとソノ」宮島・仁田編(1995)所収
－－－－(1995d)「ソノＮとソレ」宮島・仁田編(1995)所収
－－－－(1995e)「定情報のマーカーとそれをマークする助詞との相関について」1995年度日本語文法談話会発表要旨
－－－－(1996印刷中)「接続詞と指示詞の関係に関する一考察」『阪大日本語研究』8 大阪大学
神尾昭雄(1993)「名詞句の構造」『講座現代の言語第1巻 日本語の基本構造』三省堂
金水　敏(1995)「日本語のいわゆるＮ'削除について」『第三回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム報告書』
金水　敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 講談社サイエンティフィック
－－－－－－－－－－(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」金水・田窪編(1992)所収
－－－－－－－－－－編(1992)『日本語研究資料集　指示詞』ひつじ書房
正保　勇(1981)「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』 国立国語研究所
杉浦滋子(1995)「ソの指示性の低さについて」1995年度日本語文法談話会発表要旨
田中　望(1981)「「コソア」をめぐる諸問題」『日本語の指示詞』国立国語研究所
高橋美奈子(1996印刷中)「修飾節中にコ系指示詞を持つ名詞修飾表現について」『現代日本語研究』3 大阪大学

寺津典子(1983)「言語理論と認知科学」『認知科学への招待』ＮＨＫブックス
寺村秀夫(1977)「連体修飾のシンタクスと意味－その２－」『日本語・日本文化』5 大阪外国語大学留学生別科
野田尚史(1989)「真性モダリティを持たない文」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
－－－－(1994)「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105
浜田麻里(1993)「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』3 国際交流基金日本語国際センター
林　四郎(1973)『文の姿勢の研究』明治書院
－－－－(1983)「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座５運用Ｉ』朝倉書店
前田直子(1995)「逆接を表わす「～のに」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』5 東京大学
三上　章(1955)「代名詞と承前詞」『現代語法新説』くろしお出版から復刊
三原健一(1994)『日本語の統語構造』松柏社
安井　稔・中村順良『現代の英文法10　代用表現』研究社
宮島達夫・仁田義雄編(1995)『日本語類義表現の文法(複文・連文編)』くろしお出版
Halliday,M.A.K.(1985) *An introduction to functional grammar*, Edward Arnold
Halliday,M.A.K. & Hasan,R.(1976) *Cohesion in English*, Longman
Quirk,R. et. al.(1985) *A comprehensive grammar of the English Language*, Longman
Saito,M. & Murasugi,K.(1990) "N'-deletion in Japanese" in Hoji,H.(ed.) *Japanese Korean Linguistics*, SLA Stanford

（いおり　いさお）　本講座大学院生